

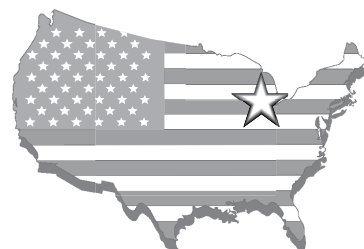


Tokyo, JAPAN

アメリカ留学自己変革記 (6)

早稲田大学政治経済学部4年

宇野 真弘



Wisconsin, U.S.A.

2008年9月から2009年6月まで、大学の交換留学プログラムを利用して、ウィスコンシン州のローレンス大学に留学しました。今回は、留学後のニューヨークでのインターンとしての体験を記します。

こんにちは。私は、ウィスコンシンにあるローレンス大学での交換留学終了後、ニューヨークでインターンシップをしています。私が働くのは、デイリーサン・ニューヨークという邦字新聞社です。同社は、マンハッタン区を中心に、ニュージャージー州やコネチカット州もカバーする無料の日報紙を発行しています。記事を書いている現在では、インターンの期間がおよそ一ヶ月残っていますが、今回は、インターンを通じてこれまでに学んだことを書いてみたいと思います。

私の仕事

国際社会に貢献できる人。これが私の目指す人間像です。どのように貢献するかという道はいくつもありますが、私にとってはその一つがジャーナリストという職業です。しかしジャーナリストの仕事に関しては、本で読んだり、講演会で聞いたことしか知りません。そこで、同社での編集インターンを通じて、「取材をして記事を書くということがどういうものなのか」を実際に体験しようと考えたのです。

最初に私が任された仕事は、美術館などから英語で配信されるプレスリリースを日本語でまとめ、イベント情報として記事にするというものでした。私はその業務内容に失望していたものの、同時に、私のような学生がいきなり取材に行かせてもらえるわけがない、という諦めも感じていました。そして、割り振られた仕事を黙ってこなすべきだと自分に言い聞かせていたのです。しかし次第に、「積極的に挑戦すれば新しいことを学ぶことができる」、

という留学中に学んだ教訓に立ち返るべきだと感じるようになってきました。また、インターンから正社員になった編集の方からも、「自分から『これをやらせてください』とお願ひした方が良い」とアドバイスを頂きました。そして、どんな取材でも行かせてほしいという意味を示すようになってから、取材があれば声を掛けてもらえるようになりました。

クリティカルな視点

私がこれまでに担当してきた取材には、イベントやそのプレス披露会などがあります。中でも、ニュー・アメリカ・メディアという非営利組織が主催した、女性移民に関する調査結果についてのパネルディスカッションは、自分の至らなさを知ることができたという意味で、とりわけ印象に残っています。この取材を通じて、自分のクリティカルな視点の未熟さを痛感しました。

同調査は、リサーチ機関のベンディクセン・アンド・アソシエイツが、中南米諸国、アフリカ諸国、インド、アラブ諸国、韓国、中国、ベトナム、フィリピンからアメリカへ移住した1000人以上の女性を対象に、生活状況や家庭での役割についてのアンケートを、2008年8月から9月までの間に実施したものです。調査結果には、単身アメリカにきたこれまでの男性移民と異なり、家族の絆を大切にしながら生活水準を向上させてきた女性たちの姿が映し出されていました。また、家庭における女性の影響力が向上していることも明らかになりました。

女性移民の多くが、言語の壁や差別、健康保険の欠如、低賃金労働など、さまざまな困難に直面している事実も分かりました。パネルディスカッションでは、移民の支援団体や女性の権利擁護団体のトップが、それらの解決について話し合いました。現在活発な健康保険改革の議論に移民が参加できていない現状や、第二外国語としての英語習得プログラムに対する政府の出資不足を指摘し、その解決に向けた運動のために「女性を組織しなければならない」と訴えました。

しかし、ある女性が次のような質問をしました。「この調査結果からジェンダーについて話すことが本当に可能なのか? ロジック

